

修士論文（要旨）

2011年1月

ジェロトランセンデンスの視点からみた超高齢者のサクセスフル・エイジング

指導 芳賀 博 教授

老年学研究科

老年学専攻

209 J 6009

林 雅子

目次

I	本研究の背景	1
II	ジェロトランセンデンス理論	2
	1. ジェロトランセンデンス理論の起源	2
	2. ジェロトランセンデンスの次元	3
III	わが国における先行研究と課題	4
IV	本研究の目的	5
V	研究方法	6
	1. 調査対象者	6
	2. 倫理上の配慮	6
	3. 調査方法	6
	4. 分析方法	7
VI	結果	7
	1. カテゴリー間の関係	7
	2. 【超高齢者の日常】	8
	3. 【ジェロトランセンデンスの視点からみた超高齢者の人生あるいは世界】	13
VII	考察	16
	1. 《社会と自己との関係の変化》と社会的個人的関係の次元	17
	2. 《この世を超えるものとのつながり》と宇宙の次元	18
	3. 《自己認識の変化》と自己の次元	19
	4. おわりに	20
VIII	本研究の限界と今後の課題	20
	カテゴリー一覧	22
	参考文献	

I. 本研究の背景

老年学の究極の目標は、いかに幸せに人生を全うするかということにある。それは、いかにしてサクセスフル・エイジングを実現するか、と言い換えることもできる。20世紀後半の高齢化は、深刻な社会問題となってきた。1980年代以降登場したアクティブ・エイジングやプロダクティブ・エイジングなどは、サクセスフル・エイジングが個人の側だけでなく、社会の側の関心と要請に関わる課題にもなったことのあらわれでもある¹⁾。しかし一方で、社会の側の要請—自立した生活を送り、社会に有用な存在であり続けること—に応えることのできない超高齢者の存在がある。超高齢者のサクセスフル・エイジングを説明しようとする時に、ジェロトランセンデンス理論は非常に魅力的である。

II. ジェロトランセンデンス理論

ジェロトランセンデンス理論はスウェーデンの社会学者トーンスタムが、離脱理論を再構成し新たに構築した理論である。離脱理論は、中年期の活動の維持に価値をおく活動理論と違って、個人の社会からの撤退を人間に本来備わっている発達の特性とみなすところにある。トーンスタムも高齢期に、中年期とは異なる独自の意味を見出し、老いを中年期の物質主義的、合理的なものの見方から、生活満足を増加を伴う、より宇宙的、超越的な見方へのメタ・パースペクティブな変化としてとらえる²⁾。トーンスタムによる質的研究³⁾の結果、宇宙、自己、社会的個人的関係の3つの次元が示された。

III. わが国における先行研究と課題

中畠と小田⁴⁾が2001年にジェロトランセンデンス理論をレビュー論文で紹介した。2007年に石原⁵⁾が日本語版 Gerotoranscendence 尺度の検討を行い、日本人地域居住高齢者にはあてはまらないことを示した。2006年に富澤⁶⁾が、奄美群島の超高齢者を「老年的超越」の観点から捉え直した質的研究を行っている。2010年に増井ら⁷⁾が心理的 well-being が高い虚弱高齢者における老年的超越の特徴を、新しく開発した日本版老年的超越質問紙を用いて検討しているが、実証的研究はまだ少ない。

IV. 本研究の目的

これまでの諸理論では否定的に評価されがちな超高齢者を新たにとらえ直すために、日本人超高齢者の過去・現在・未来を含むありのままの姿や思いをジェロトランセンデンスの視点から注意深く聴き取り、日本人超高齢者のジェロトランセンデンスの概念を明らかにすることを目的とする。

V. 研究方法

認知症がなくインタビュー可能な85歳以上の自宅居住高齢者を友人・知人のネットワークを通じて11名選定し、半構造化インタビューを行った。インタビューガイドは、亡くなった家族や先祖との親密感の度合い、死に対する思い、人生の喜び、身体の変化、他者との関係のあり方の変化、人生のふりかえり、などであった。同意を得てICレコーダに録音し逐語化した。KJ法⁸⁾で分析した結果、35の小カテゴリーから8つの〈中カテゴリー〉、6つの《大カテゴリー》が編成され、最終的に【ジェロトランセンデンスの視点からみた超高齢者の人生あるいは世界】【超高齢者の日常】の2つのグループに分かれた。

VI. 結果

【超高齢者は日常】の中で、〈暗い記憶〉を背負い〈ネガティブな現実〉を経験しながらも、〈明るい記憶〉に慰め励まされ〈ポジティブな現実〉を生きている。中心にあるのは《亡

くなった身内や先祖へ手を合わせる行為》である。【ジェロトランセンデンスの視点からみた超高齢者の人生あるいは世界】では、超高齢者は、〈手放すことによって幸せ〉を感じたり〈自然体でいる〉ことで《社会と自己との関係が変化》し、〈自負する気持ち〉が強まり〈私の人生悪くはなかった〉と思えるほど《自己認識が変化》してくる。この世に存在していないものに見守られている感覚から死を怖れなくなり、この世であり得ないことの経験を通じて《この世を超えるものとのつながり》をいっそう感じるようになる。

VII. 考察

日本人超高齢者のジェロトランセンデンスには先祖信仰⁹⁾や老子の思想¹⁰⁾などが関連していると思われるが、【ジェロトランセンデンスの視点からみた超高齢者の人生あるいは世界】の3つの大カテゴリーとトーンスタムの提唱するジェロトランセンデンス理論の3つの次元を対照させると、ジェロトランセンデンス理論の自己の次元の自己との対面、自己中心性の減少、自己の超越を除いて、かなりの程度の類似性が見出された。

VIII. 本研究の限界と今後の課題

対象者が都市部の自宅居住者で、男性3名、女性7名で性別に偏りがあったこと、経済的に恵まれた環境にあり、教育レベルも比較的高い水準にあったことから超高齢者一般にあてはめるには限界がある。今後はさらに調査対象とする高齢者の層を広げ、日本人高齢者のジェロトランセンデンスの世界を明らかにしたうえで、量的研究を視野にいたした尺度開発を目指す必要もあると考えている。

参考文献

- 1) 小田利勝『サクセスフル・エイジングの研究』学文社、29-31、2004.
- 2) Tornstam, L. *Gerotranscendence*. New York, Springer Publishing Company, 2005.
- 3) Tornstam, L. “Gerotranscendence: The contemplative dimension of aging,” *Journal of Aging Studies*, 11(2), 143-154, 1997.
- 4) 中島康之、小田勝利「サクセスフル・エイジングのもう一つの観点—ジェロトランスセンデンス理論の考察—」神戸大学発達科学部研究紀要、8(2)、255-269、2001.
- 5) 石原房子「Gerotranscendence 尺度の交差妥当性」桜美林大学大学院修士論文、2008.
- 6) 富澤公子「奄美群島超高齢者の日常からみる「老年的超越」形成意識—超高齢者のサクセスフル・エイジングの付加要因、老年社会科学、30(4)、477-488、2009.
- 7) 増井幸恵、権藤恭之他「心理的 well-being が高い虚弱高齢者における老年的超越の特徴—新しく開発した日本版老年的超越質問紙を用いて—」老年社会科学、32(1)、33-46、2010.
- 8) 川喜田二郎『発想法』中公新書、1967.
- 9) 柳田國男『柳田國男全集 13』より「先祖の話」ちくま文庫、7-209、1990.
- 10) 加島祥造『老子と暮らす』光文社、2000.